
終点

だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終点

【Nコード】

N4657R

【作者名】

だいふく

【あらすじ】

けだるい午後に書いたもの。

特にこれといった当てもなく、なんとなく書いたもの。
けれど、どことなく意味があるようなもの。

たとえば僕が、この世界にたった一人で生きていたとして、それはきつと、とても素敵なことに違いない。

自分よりも勝っているものもないし、自分よりも偉いものもない。比べる存在がないのだから。

けれど同時に、それはとても残念なことに違いない。

自分よりも弱いものも、自分よりも劣っているものもない。

何よりも、自分のありとあらゆる感情が有効に活用されることもないだろう。

僕は今日も電車で揺られている。

一番後ろの、右側。

それが僕の定位置だ。

目的地はない。

目的地がないというのは、自分が進んでいないのと同義になるだろう。

けれども電車は走っている。

僕自身は何ら進んでいないのに、物理的には休まずに進んでいる。

何て不可解なことだろう。

今日も誰かが僕の正面に座った。

「あなたはどこへ行くのですか。」

僕は近くの人に必ず聞くように、その彼女にも聞いた。

「三つ目の駅まで。」

彼女は答えた。

それだけだ。

僕は彼女が、そこで何をするつもりなのかは聞かない。

聞いてしまうと、僕の貴重な空想が現実となってしまつから。

「あなたはどちらまで？」

彼女が聞いた。

「僕の旅が終わるまで」

僕は答えた。

終わりがいつ来るのかは分からないけれど。

彼女は目を見張った。

「まあ、あなたは終わりが見えているのね。」

「いえ。けれども、こうして乗っているだけでも近づくことが出来ます。」

「ああ、それは残念ね。それでは決して終わるはずがないわ。反比例の曲線みたいに、近づくことは出来ても決して交わらない。」

僕は苦笑いをした。

「あなたの終わりは、三つ目の駅ですか？」
僕は聞いてみた。

「いいえ。でも、私の終わりは駅ではないの。もっと、別の場所。」

「ああ、あなたにとってこの電車は、単なる通過点なのですね。」

「ええ。そして恐らくあなたも。ただ、別の方法が分からないだけかもしれません。」

彼女はそう言って微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657r/>

終点

2011年10月8日03時01分発行